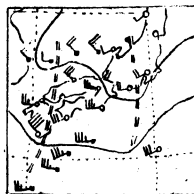
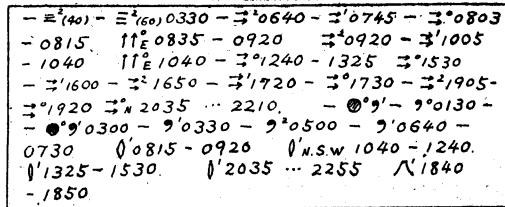


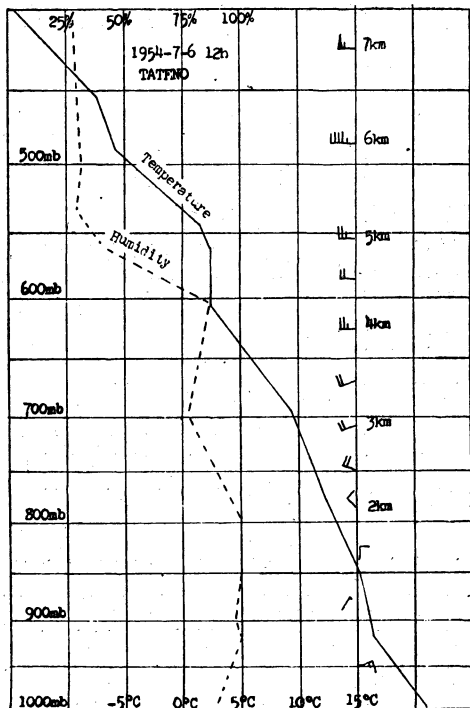
第4図 地上天気図



第5図

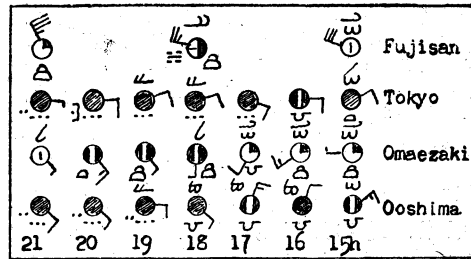


第7図 当日の富士山の記事



第6図

く見られることである。当時の気象変化を調べてみるに
 まず富士山では(第7図)7時半頃までは雨があるが、
 それ以後は流れ雲が時々見られる程度で、ほとんど常に



第8図 当日の天気雲地図

異常視程を示している。すなわち梅雨を起す雲の高さが
 富士山頂まで達する事が少く、視程は良いといえる。6
 月の山岳気候表〔2〕をみると日照率は富士山が55%で
 全国第2位を示し、箱根山は21%できわめて少いことは
 よくこの事実を物語っている。もっと平たくいえば富士
 山は梅雨時でも雲の上に出ていて視程が良く、すばら
 しい雲海が見られることが多いといえるであろう。

次に各地の天気をしらべて見るに大島は19時から、東
 京は20時から雨になっているが17時には乱層雲となっ
 ているのみで雨になっていない。しかしこの雲は小さいか
 ら局地的に雨を降らせているかどうかは、この図からは
 わからないことになった。21時に富士山がNNW35ノ
 ットとなったことは上層の谷の通過を示すものであろう。

(1955. 5. 25) (中央气象台)

- 〔1〕ナンガバルバット 朋文堂
- 〔2〕山岳講座 白水社

Stardust と雨

オーストラリアの E. G. Bowenが
 1953年に発表した流星群が seeding
 の役をして毎年一定の日に雨が多い
 とする説は、われわれの意表に出た
 新説であった。新説はとかくとっ
 に見えるので広く興味と関心を持
 たれた。本月4月 Oliver と V. J.
 Oliver アフリカの赤道地域のデー

ターを用いて新説が適用されるかど
 うかを調査発表している。場所とし
 ては東アフリカをえらび、南ローデ
 シヤも調べた。統計的な取り扱いを
 したのであるが、結論としては、
 Bowen説を支持できるとはならな
 かった。けれども何分にも流星説が大
 気の超高層にとどいてから地上付近
 までどのようにして到達するかも全

然わからないし、粒子の大きさも十
 分な確定をされているわけでない。
 だからわれわれの手に入るデータ
 だけで結論を出すわけにはいかない。
 わが国でも磯野・駒林両氏によつて
 火山と降雨の関係が論じられてい
 るところでもあるし、流星群と雨の関
 連は精密な研究ができるまで積極
 な否定はできないであろう。(伊東)